



デュランタ

114編は勇壮な比喩的表現によって、イスラエルの民の奴隷からの解放と、乳と蜜の流れる国を嗣業とした記念の出来事を思い返して、水を支配される神に賛美を捧げています。

冒頭の **イスラエルはエジプトを／ヤコブの家は異なる言葉の民のもとを去り(1)** は出エジプトの出来事を指しています。エジプトは10の災いを受け、イスラエルを解放すると約束しましたが、いざ逃亡したと知ると、馬と戦車600、騎兵と歩兵で追って、それを阻止しようとしたのです。イスラエルは葦の海の手前に宿営していました。その背後にエジプト軍が迫ったのです。その時のことを一言で **海は見て、逃げ去った。(3)** と、歌っています。

モーセは民に対して **主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。(出エ14:14)** と命じ、計画通りに出発させました。モーセは **杖を高く上げ、手を海に向かって差し伸べて、海を二つに分けなさい。そうすれば、イスラエルの民は海の中の乾いた所を通ることができる。(出エ14:16)** と、神の命じるまま、民に海を渡らせたのです。神は火と雲の柱をもってエジプト軍をかき乱され、やがてエジプト軍はもとに戻った海の水から逃れられなかったのです。神に守られたことを感謝して **ユダは神の聖なるもの／イスラエルは神が治められるものとなった。(2)** と、自らを聖なる民族として、誇り高く歌っています。

また、カナンを奪うための儀式として、ヨルダン川を渡った意味付けをしています。モーセの後継者である **ヨシュアが祭司たちに、「契約の箱を担ぎ、民の先に立って、川を渡れ」と命じると、彼らは契約の箱を担ぎ、民の先に立って進んだ。(ヨシュ 3:6)** とあります。契約の箱を先頭に据え、境界線を越えたのです。民の先頭に主が立たれる、主の進軍であるとの思いで、ヨルダン川を渡ったのです。この時、春の刈り入れの時期で、ヨルダン川の水は堤を越えんばかりに満ちていたが、箱を担ぐ祭司たちの足が水際に浸ると、川上から流れてくる水は、はるか遠くのツアレタンの隣町アダムで壁のように立った。そのため、アラバの海すなわち塩の海に流れ込む水は全く断たれ、民はエリコに向かって渡ることができた。**(ヨシュ 3:15)** と、葦の海の出来事を重ねています。イスラエルは約束の地に足を踏み入れた喜びを一言で **ヨルダンの流れは退いた。(3)** と、歌っています。

神が水を支配し、恐怖を乗り越えさせた奇跡を思い返し、**海よ、どうしたのか、逃げ去るとは。ヨルダンの流れよ、退くとは(5)** と繰り返しています。と同時に **山々は雄羊のように／丘は群れの羊のように踊った。(3)** と、山も動いたと歌います。そして、荒れ野で飢え、渇いた時、水を与えられたことを書き加えています。**地よ、身もだえせよ、主なる方の御前に／ヤコブの神の御前に／岩を水のみなぎるところとし／硬い岩を水の溢れる泉とする方の御前に。(7)** と、混沌と恐怖の水を支配されるだけでなく、命の水、清めの水を与えてくださる神を賛美しています。

『讚美歌 21』には関連讚美歌はありません。ジユネーブ詩編歌はチェロが加わって、深みのある演奏となっています。

<https://www.youtube.com/watch?v=4907Zlrizlg&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=114>